

ふるさと運動

「先人のわらじの跡をたずねて」

十 谷 峠 道 中

早川町教育委員会



十谷分校にて歓迎会



茂倉部落郷米会のつくったみそ汁をすりながらの歓談

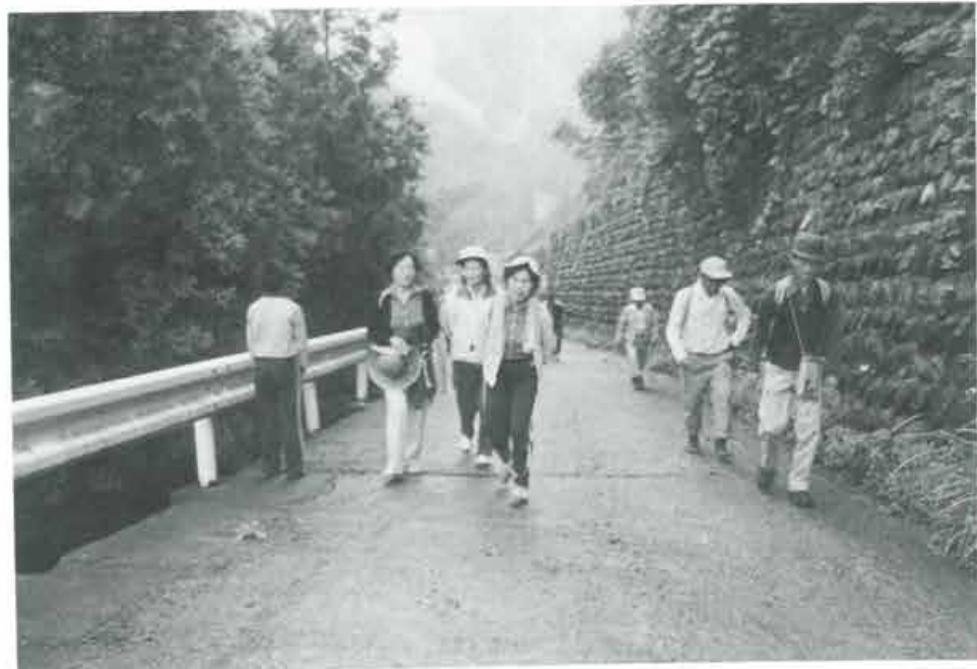


バンサイを三唱してすえ長い交流を誓いあう



ああ、あれが十谷部落だ々

第一部
昔の十谷峠越え



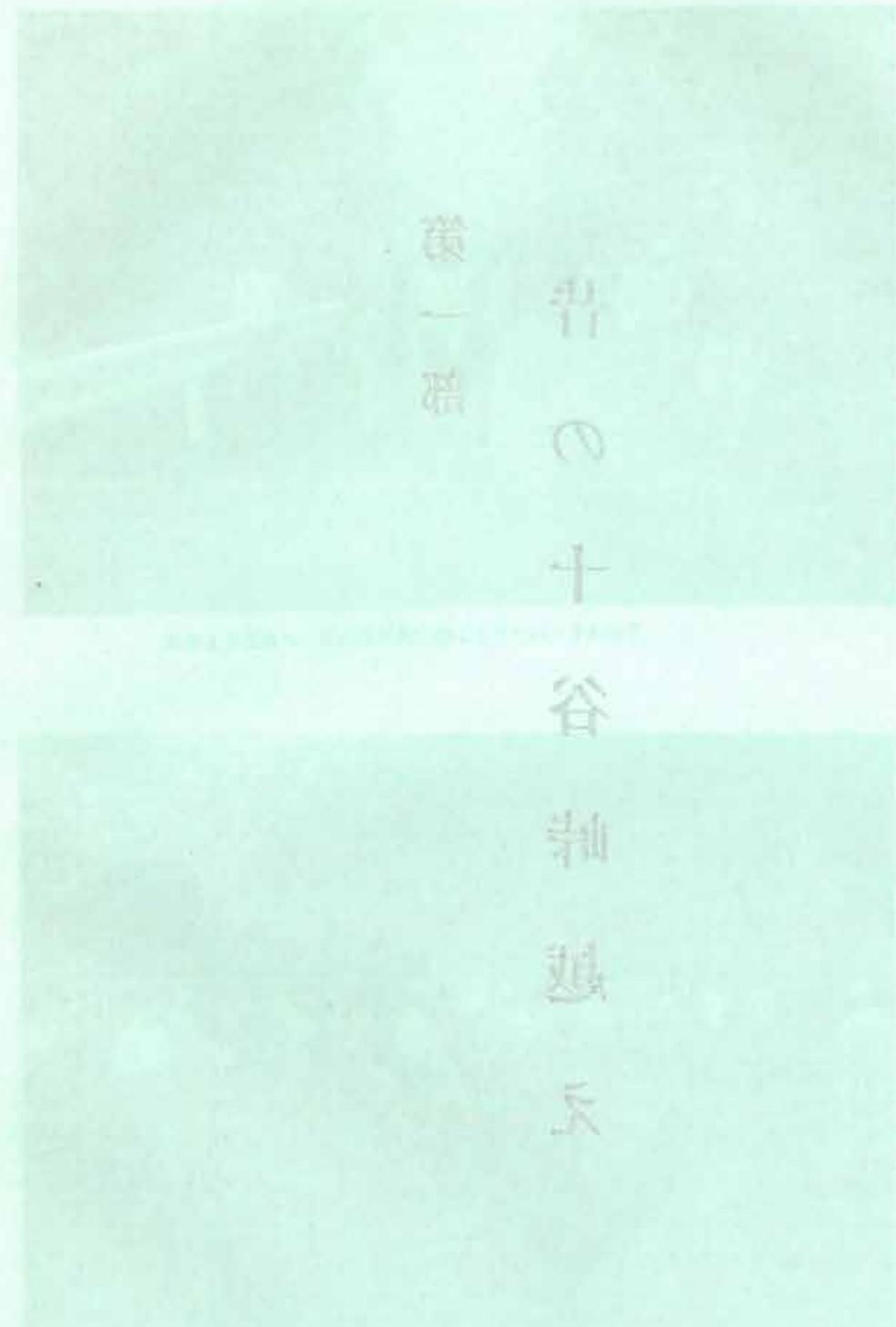
新倉より茂倉へ まだ先が長いのにもうヘッタかな？



茂倉公民館広場にて各班にわかつて諸注意をきく

目 次

十谷峠を越えて	2
部落と他との交易（茂倉区郷土誌より）	3
生産・生業について	4
炭焼きのこと・峠路	5
昔の十谷峠	6
「みみについて」	10
ふるさと運動 十谷峠越えに参加して	10
先人の足跡を訪ねて	15
十谷峠を越えて	16
五開中学校生徒の感想	19
十谷峠道中に参加して	20
編集後記	23



十谷峠を越えて

早川町教育委員会教育長 水地市

紅葉には未だ早い九月末、ふるさと運動の一環で、「先人のわらじの跡を訪ねて」と銘打ち、茂倉から鰐沢町の十谷部落に通ずる旧道を踏破して、昔の人達の生活の実態を知つていただくという事で計画致しました。予想以上に参加者が多く、参加者の中には八才の子どもから八十二才の高令者まで、巾広い年令層の老若男女が茂倉公民館前に集合しました。

茂倉では部落をあげて歓迎していただき、真心こめたお茶の接待に感謝しつつ、一同元気に出発しました。生憎の曇り空ではあったが、山道を登るには涼しくてよかったです。私は十二年前に、茂倉部落の熱心な要望に応え、当時、助役という立場で茂倉へ十谷林道を開設する事でこの旧道を踏破した事がある。あれから一昔、沿道の立木も大きく成育して立派な森林になつていていた。老人を先頭に最後は中学生、雑談に花を咲かせながら途中何回か休憩して予定より少し遅れて十谷峠の頂上に全員元氣に到着した。頂上もまだ曇り空で、素晴らしい景観が見られない事が残念であった。重いリュックの中からは種々のものが出で来る。老人達は昔を懐かしみながらチビリチビリやっている。峠での一杯は又格別だそうである。そよ風に乗つて味噌汁の臭いがする。茂倉の郷榮会の人達がわざわざ峠まで水を背負い上げて真心をこめた味噌汁の接待である。十谷側から五開中の校長、教頭先生、PTAの会長さんをはじめ、生徒の皆さんが迎えに来てくれた。早川北中と五開中の生徒の感激の握手が交された。全員の拍手がこだまする。愈々待ちに待つた楽しい昼食だ。思いがけない味噌汁のものでなしに美味しい美味しいの連発で何杯もお代りを出している。昼休みの間、昔この道を炭を背負って十谷に行き、帰りは米や酒を買って茂倉に帰ったというこの唯一の生活道を毎日往復したという老母から、当時の茂倉の人達の苦労話も聞いた。

部落と他との交易

茂倉区郷土誌より（昭和四十七年）

甲斐国誌に「夜子沢にそつて登り中山、江尻窪を経て新金嶺に出で早川入諸村への通徑なり」とあり、夜子沢辺では早川往還と云つてゐる。新倉峠越の道路が早川入への主要交通路であったことは、京ヶ島の齊藤義一家の天保十五年辰十月市川役所から出された文書の村継ぎ須の村名に市川、高田、鰐沢、箱原、西島、手打沢、切石、夜子沢、中山、江尻窪、笛走、博坪、千須和、菜袋、塩の上、京ヶ島とあり、その経路を示している。又物質は問違を経て京ヶ島に運んだ。当時の交通について新倉の場合「当村道の義は十谷峠を通り甲府往来に而湖島往来も御座候」とあり新倉への食糧や雑貨は十谷峠を越えて鰐沢から入ってきたもので早川や大原野を通つてきたものではなかつた。

茂倉区古書類の中に寛正元庚辰年今より五百九年前の鰐沢から鬼島、鳥屋を経て十谷峠を通つて米を運んだ認可書類がみつかつた。五百九年前に十谷往還があつたことを証明したものである。

大倉林業がはじめてからも十谷なら日帰り出来たが鰐沢迄だと泊らねばならなかつた。馬が使われたのは大正のはじめからで大部分の荷は人の背ではこんだ。大正五、六年頃の運賃は一貫目二錢で大人は十七、八貫背負つた。当時酒一升二十六錢であつた。新倉や茂倉から搬出したのは楮、三柳、木炭、杉の赤目、桐材等であつた。

大正六年茨城県出身の窪田四郎氏の手により早川の水力を利用しての発電企画があり、早川沿岸六ヶ村に原、下山の八ヶ村で早川沿岸治水会が組織され、電力会社と交渉水利権の代償として幅員九尺の道路開作が約され、現在の右岸県道奈良田線の盤橋となつた。

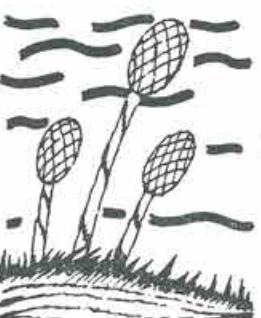
十三年秋には道路は新倉迄完成上流の発電所建設資材を運搬するに軌道が布設され、早川第三、第一発電工事に着手、昭和二年四月頃には全部が

愈々十谷に向かう峠を降りる。曲り曲つた急坂の山道をすべったり転んだり中には地蜂にさされた人もいた。老人でありながら数人の先行した元気には感服する。下りを三時間もかかるべつと十谷温泉に到着、やれやれ一安心、一人の落伍者もない。

振り返つて山を眺めると林道が山の中腹まで開通している。茂倉側もそ

うである。林道の一日も早い全線開通を念じながら十谷部落の分校に到着した。ここでは十谷部落の子供から老人まで、区長さんを先頭に部落をあげての歓迎を受け、婦人会の皆さんから十谷名物の「ミミ」の料理のもてなしを受けた。温い人情と真心のこもつた人間性は、茂倉部落に同様、昔も今も変りない貴いものがここにも残つていた。参加者全員が身体で感じたこの体験を来年も計画してほしいと願つていて。

この催しに参加していただいた方に、特に茂倉部落の皆さん、又、私達を真心から歓待していただいた十谷部落の皆さんに、厚く御礼を申し上げると共に、両部落が林道の開通によって新しい時代の交流が、一日も早くからん事を念願してあいさつと致します。



完成して軌道は不要となつた。そこで八ヶ村が連合して軌道を譲り受け昭和十三年迄軌道組合により運営された。

此の間組合村内の一、二に利権屋によつて軌道を中巨摩郡神正宗の横内氏に売却する策謀もあつた。塩島から新倉迄の幅員が十五尺の払幅工事が十七、八年の間に完成、バスが新倉まで乗り入れとなり、新倉から西山温泉へバスが入つたのは昭和三十年十月のことである。バス乗入前の西山村との交易は水の窪よりやぐら草里を通り倉尾根山門の滝の中程を通り休場を経て下湯島に達した。

又十谷峠をこして宿場に至る五里所要時間は五時間であった。昭和五年、大昔の十谷往還は新倉御不動様東野天宮様と尾根伝いに山の神に到り、山の神下を通り横道下の肩に到り、それより茂倉川と南沢の出合を尾根伝いに下大平、上大平の尾根を上り大境二八五九一八五番望月巻仲間地中央を経て現水の尾根地下水上を通り横伝いに峠に達した。後、応永の中頃横道下の尾根伝いに上り現在の茂倉に達した。井戸道を経て大元辻二五八六番より向坂牛頭天皇様の尾根を上大平に達したのは慶應の中頃である。向坂から御前かれを経て上大平水の尾根地下水を経て桜の尾根を通り峠へ達したのは明治初期の改良道路である。（口碑）口碑によると御前がれの岩切が難所とされていて御前がれを起点として上り下りの道の測量したとの話を伝えている。昔の人の辛苦が想像されるのである。大正五年、六年までは人の背により荷物が運ばれた。農閑期の十一、十二、一、二、三月頃は毎日八、九十人の人が十谷区と交易した。倭屋、西之店等は繁昌した。十谷区の忠次さんという便利屋が峠の近くで「おめいで百人だ」と言つた事を思い出す。

師走の押しせまつた二十日過ぎになると新倉、茂倉の人達が宿場、鰐沢に泊りがけの人や、十谷へ日帰りのせち買の人達で大草里はにぎわつた。

突然綿がおちる様な大雪が降り、こぶな休場に上る頃は一尺以上になり、

峠は一尺五寸にもなる。荷物は木の根元において身軽になつて峠を下る。上大平まで来ると茂倉が一目でわかる。「雪が深いから迎えに来てくれる」と呼ぶと部落の方から「荷物はおいて御前がれを早く通つてこい」と向坂辺まで迎えに行って、部落に着く頃は一面銀世界の夜のとおりがおりる頃、新倉村の人々も茂倉の知り合いの家に一夜のねぐらを求めて翌日、部落の人達も思い思に応援の雪踏みをしながら昨夕の荷物を分けあつて下ってくる頃は新倉の村人も茂倉近くまで雪を踏乍らせち買の迎えに来る。なごやかな風景であった。

何時も峠の頂上を通る頃、ここで明治四十四年四月二十六日に十谷区長望月仙吉、大原野区長深沢市右衛門、新倉区長小菅治作、茂倉区長深沢松次郎外三役、十谷改修道路の連合会が開かれたことを思い出して六百年前からのお倉道の十谷往還に四部落の関係村が道路維持の苦辛さがしみじみと想像されるのである。

こうした道路維持の苦辛も昔の物語となり、百八十度の回転をなし、物質は新倉より上がることとなり荷物ばかりでなく車がみえると身軽でも乗りたくなる世の中となつた。

生産・生業について

茂倉 深沢 さくの (88才)

みつまた、かどは山に植え、三年目ごろ切りとつて今までふかし、皮をむき、その皮を乾燥して五貫丸のたばにして登り一里、下り二里の峠道を越えて十谷村で待っている柳川や西島の仲買人に売つた。

炭は十谷部落の人達に売る。まゆは鰐沢の深沢製紙に売る。板は山主が

山を買って、こびきひきに板をひかして、貫目一錢の駄賃で十谷村に運んだ。

酒、米、醤油、塩、砂糖などは十谷の「倭屋」から買つたり、酒は増穂の「梅が枝」という酒屋から買つてきた。行きも帰りも背中に何かを背負

炭焼きのこと

倉本 なを (80才)
深沢 丑益 (80才)
望月 国豊 (78才)

昔から生計を立てるには炭を焼いて売る。又ある時は品物を交換した。

一年中炭を焼いている人、冬には酒屋奉公に行く人、村の半分ぐらいの人が炭を焼いていたそうです。遠い山は新倉山の新保地で焼いて新倉部落を通り、茂倉部落を経て五開村、十谷まで峠を背負つていったそうです。

一袋の重さは十貫目ぐらいで金にして八銭ぐらいで米や粉、衣類などと

生活の必需品とを交換したそうです。炭を焼くために切つた後の山地には焼烟にしてアワやキビ、ソバなどの作物を作つて生活を送つたということです。

昔、峠を越して生活していた頃、病人が出た時はどうしたか。

2、重い病人の場合は、村の若者をたのんで（こいとり）といつて信心をやりながら、又、病人のまくらもとで拌みながら峠を越して鰐沢の医者にかけた。

3、軽い病人の場合は家の人が付添つて通つたという。

鰐沢病院（島田医院）、岐南病院（秋山医院）、六郷（山田医院）

茂倉の墓地に引立されている石碑の運搬も十谷峠を越えた石碑が数本あり、中でも明治三十九年～四十年にかけて四十五cm×四十五cm×百八十八cm位の手堀りされた石を甲府方面より十谷まで馬車ではこび、十谷から茂倉まで次の方法で運搬されたそうです。

茂倉を暗いうちに出て、十谷から峠までは人の肩をたより八てん九てん（十六人～二十人）でかつぎ、その先に縄をつけて引っぱりながら峠まで上り、そこでもう夕方になつたそうです。峠より沖の川原までは木のそ

つており、十谷に物を運んだ。帰りは山で薪を拾つて帰る。夏は草だ。仕事に夢中になり山で日が暮れると途中足もとがわからず困つた。

夜はわらじを作る。朝は暗いうちに出掛け、よく背負う人で十五貫位、普通十貫位背負つていた。わらじは雨の日特に切れやすく、もんべへのねも沢山ぬれるとしほってはいてきた。わらじが途中で切れるとあんではいた。

冠婚葬祭の時は十人位の人がむすびを背負つて増穂の「梅が枝」という酒屋まで酒を買いに行つた。十谷峠で行き合つよう後に後から十人位出掛け峠でみんなで酒をのんだり、駄賃背負が行き合つとねんばに入れてやつた。だから十俵のうち一俵は途中でのんびりしまつた。

夏のように暑い時期には夜駄賃といつて、昼すぎに家を出て、夕飯頃峠につき家のこといろいろ話しながら食べた。その後十谷の「倭屋」にいき、米を背負つて来て新倉まで運んだ。新倉についた時は風すぎだった。明けても暮れても十谷峠を越さなければ生活が出来ないという苦労の連続で今では想像のつかない話しです。気違ひのようになつたので、屋と朝を間違え、屋間うとうとした後、水おけをかついで「おはようございます」と言つて歩いた人もあつた。

新倉の人も大原野の人も皆、十谷峠を越えて生活していたので道はにぎやかだつた。

途中で雪が降つて來た時、大原野、新倉の人は家に帰れず、茂倉に泊つていつたこともある。

生活用具も全部自家製で、まゆで糸を作つたり、藤づるを収つて来て煮たり、たいたたりして糸を作り、地ばたではたを織つたたほの布で、もんべ、着物を作つた。男の人はワラで背負い袋を織つたり、雪ぐつを作つた。

そのうつ、めんようを飼うようになり、ハサミで毛を切つて糸ぐるまで毛糸を作り、セーターを着るようになつた。毛糸は矢崎さんという仲買人に洗髪をしていただいて峠を越えて売つたという。

然し乍ら時はうつり時代とともに宿場（現在の十谷、鰐沢）に出て生活物資を買ひ、土地の産物を出すようになり、宿場に通する峠道が必要になつて來た。栗餅をかじり、ヒエの団子を腰にぶらさげ、せつせと道造りに励む村人達の姿が容易に想像することができる。

現在ある道はこの頃より二度ならず三度目（明治初期）に危険のない、しかも最短距離を通るよう改良されたものである。

当時は土地の産物といつても焼烟の役目を終えた山地にミツマタを植え込み、皮をはいで売り出す。また、秋より春までの農閑期に男の人は山に入り、遠い山では栗、ヒエ等の食糧を持って、掘つ立て小屋を結んで泊り込みで炭焼きに精を出す。

生産された木炭は袋詰めにして運搬するのは主として女人達の役目で

あつた。それぞれの体格に応じ十五貫（60匁）十貫（40匁）と肩に喰い込む荷物を背負って十谷までが一日の行程であった。今でこそ峠の見晴らしに立って周囲の山々を眺め富士の姿の美しさに歓声をあげる余裕もあるが、一日の行程に追われ汗を拭ふいとまを惜しんで黙々と歩を運んだといふ。

また、帰りには生活用品である食糧（麦、米、小麦粉等）や砂糖、塩、マツチに至る雑貨まで帰り荷として少々軽るく背負って再び帰りの峠にのぼる。疲れたからだにむちうて、やっと暮れ暮れのわが家にたどりつく。ぼうきれのように疲れた足で野菜を取り、夕食の支度をしてやっと夕食、ごろんと横になりたいが明日履く草履を造らねば、縫糸のつくりもある……。現在の我等には想像も及ばぬ苦労の連続である。

或る人が夜なべ仕事の草履造りで最後の仕上げの時に、余分のひもを切るつもりがランプの灯りで薄暗らく肝心の鼻緒を切り落してしまった。尊い時間をかけて仕上げた草履が使いものにならず、声をあげて泣いたといふ哀しい話を今に至る今日でも語られ聞かされるのである。

当時の思い出話を私の聞いたほんの一片を書き記し峠路を偲びたいと思う。

（資料は郷土誌および口碑による）



昔の十谷峠

五開の中学生が十谷の老人に聞いたもの

のをまとめたもの

その昔、早川の人たちは、十谷峠をこえて炭、かど、まゆなどを持つて来て、馬かた（馬を飼っている人）に売り、そのお金で米、酒、衣類、醤油などの日用品を買っていった。馬かたは、この品物を西島、市川などへ運んだそうだ。ふつうの人は十貫目（現在の四〇匁）ぐらいの荷物だけれど、力のある人は十六貫目（現在の六〇匁）もの荷物を背負って来たという。

一日がかりで買物に來るので、麦とあわのべんとうを持ってきて、その日うちに帰る人があれば、十谷の旅館へ泊つて、あくる日帰る人もいたようだ。早川から十谷まで片道五時間ぐらいかかるという。とても苦しい道だったのに、毎日のように来る人もいたようだ。

なかには鶴沢の本町や中巨摩の方まで足をのばして物々交換などもしたようだが、それぞの場所に「木質宿」があつて、交換する相手の人などを教えてくれたそうである。宿賃は一泊十錢から十五錢ぐらいだったようだ。

大正の初期には、馬が使われるようになつたので、峠のむこうは早川の人たち、こちら側十谷の人たちで馬が通れるように拡張し、峠には茶店まであったようである。朝早く、馬に荷物を積み、自分も背に荷を負つ出かけ、一日がかりで運んだ運賃が一円五十銭（現在の一万円ぐらい）

十谷から鶴沢までの道路は大正十三年に開通したのであるが、それまで川原の石をよけて作った道なので、大水が出では流され、また石ころをよけるという苦勞もしたようだし、川をあるいたために大水に流された人が川中地蔵のところでとまっていた、というようなこともあつたとか。

大正の末、早川に発電所が建設されたが、その資材や工事人夫の食糧な

どを運び、十谷峠はその人たちの往来で、それはそれは賑かなものだったようだ。

お盆、正月になると早川の人たちが子どもから大人まで多勢の人が買物に来たが、ほとんどの品物は十谷で間に合い、これを背一杯に背負つては峠をこえて帰つていったという。

今は早川ぞいに道路が開けたので、この峠を越える人はいなくなつたが、それまでは、早川の人たちにとって十谷は生活していくうえで重要なところであつたし、この十谷峠の道はその生命線でもあつたわけだ。

茂倉の方からは毎日三〇人から五〇人の衆が炭やらみつまた、イチロクにひいたかつらの板を西之店に出したもんで、おらん家でも問屋のようにしていて、特に炭をあつかつていたが、峠をこして駄賃は一貫目二銭ぐらいたつたと思います。

わしらも工事中のことで若い時分酒を一俵よって新倉の浜田屋へつけたこともあります。お寺の近所に浜田屋のあるころでした。なにしろ新倉の山の神の辻は西日で暑くてつらかったもんです。酒一俵で二十五銭ぐらいたつたと思います。

峠までこつちから五〇丁あり、途中に大草里といふところに二軒家があり、別に店ではなかつたが、みんな休みん場のようにしていて茂倉の衆も十谷の衆もお茶をよばれたりして、メシを食つて休んだものです。メシといつても麦ばっかりのバクメシをメンバに、毛ぬき合せにつめたのをミソをからんで腹いっぱい食うだけが楽しみのようなもんで、毎日同じことの

昔の十谷峠

十谷 樋 口 清 光



繰り返しだったもんです。二〇貫から二十二貫ぐらいしょつて峠をこえるもんで夏の暑いさかりは特にえらく、無駄話をするでもなく、ただ汗を流して前の人にくつついて歩いたもんです。途中こつち側には大草里の上の石休みん場と言うところに水が出ていて、そこで休んだり、メシを食つたりしたもんです。又、茂倉の方には水の尾根という冷たい水の出るところがあり、汗をふいて生きかえつたようになつたもんです。

冬なんか雪がなんぼ降つても、そうですね三尺ぐらいはつもつていても、こぎぬけてかよつたもんですから昔の人はしつかりしたもんですよ。まあ、昔は朝暗いうちから夜くらくなるまでこの峠を歩いたもんで、しそうこと、食うこと、寝ることが毎日だつたわけです。

茂倉の衆は炭や板、みつまたなんかをしょつて来て、帰りもみな米とか塙、干物なんかをしょつて帰つたもので、特に節季の頃には多ぜい買い物に来て店がさかつたもんです。

西の店に荷をつけ、焼酎を飲んでいっぺん氣げんで又、あの峠を登つていつたもんです。まあ飲まなくては帰れる元気もでなかつと思ひますよ。それでも茂倉にや酒のすきの人が多く、西の店、やまと屋あたりで一週間も十日も飲みつづけるような人もいたものです。「コウタ九日、トオキチ十日」というように強かつたんですね。ゼンベエという人も強かつたそうです。昔の人はよく飲みもしたけど体をつかつてよく働いたもんですよ。

昔の十谷峠

十谷 望月なかじ（71才）

小さいころからよく通ったものです。男衆は馬を追い、女衆は荷物をしよつて（タッツキを着てわらんじょはいて）最初のころ十谷にはお店は三軒で西之店と倭屋とエビス屋がありました。西之店ではお酒を売っています。一升酒とか一杯酒とか。その店の庭にアララギか杉の木（松という人もあるた）があり、峠を下ってくるとその木に馬をくくりつけて、また帰る時でそこで一杯ひっかけて元気をつけて登るというような店でした。エビス屋は旅館専門で、倭屋は酒とたばこなどの管製品を売っている店でした。その後中村屋当時は木賃宿といつて、やはり旅館と雑貨を扱う店とか、大正十年ごろ東京電灯が出来るころは火薬や食料の問屋の中村や源屋なんかも問屋をしていてよく茂倉や大原野や新倉と交流をしていた。盆や正月には権現にきたとはいって、家でトウフを作っていたものだから茂倉衆が一つだ、二つだと注文しておいては、それをしょいあげたものです。私は幼なかった時からそれを見て、また学校を卒業して十七、八才のころから駄賀しょいをしましたから茂倉の人たちをよく知っています。そのころ中野森というところでスミを出して、私も含め同じ年のころの友達と「中野女学校へいくてくるよ」とかハシャイでよく通ったものです。ここから山の神までいて十谷の部落を眺めながら休み、それから今のお茶臼庄におりて、そこから丸山まで登って休み、それからオオゾウリでお茶を飲んで……というようにして登つたものです。でも同じ駄賀しょいで十谷の人達より茂倉や大原野、新倉のほうが大変だったでしょう。「茂倉の駄賀しょいゆきより帰り」っていついましたから。

佐野さんとか小菅ヒラオさん、つたさんとかトラマルのおつかさん（十谷でおこもりをしていた）よく知っています。イムライサブローさんの所へはよく私もとまりにゆきました。今で言う現代人という感じの人でし

け。「トヨコ（そこの娘）がでんつくてた。」と口まねをしたものです。今でもそのおばあさんに十谷の八左衛門おじいといえば知っているでしょう。

十谷 望月なかじ（71才）

また、茂倉と縁組をしたものもいます。今の源氏荘のやちおばあさんとか、茂倉や大原野や、また保からも貞夫さんとか。米清さんとか十谷に引越して来た人もいる。今ではそれぞれ東京とか八田村などにまた出て行った人もいるけれど。

十谷でも忠治さんはなんでも屋で、犬といえば犬、ヤギといえばヤギといつたぐいで、なんでも用意したそうで昭和になつてからも、かなりいたまで商売を続けていました。源屋のおばあさんも八十才ぐらいまで、またシゲモリさんも商売を続けたものです。

茂倉では、おじいさん、おばあさんがとまりがけで中野森やゴウゾウにズミヤキにきては山をよくしたもの。ゴウゾウではゴウゾウカマスといわれ、またミツマタなどもつくったようです。

茂倉では、おじいさん、おばあさんがとまりがけで中野森やゴウゾウにズミヤキにきては山をよくしたもの。ゴウゾウではゴウゾウカマスといわれ、またミツマタなどもつくったようです。

茂倉では、おじいさん、おばあさんがとまりがけで中野森やゴウゾウにズミヤキにきては山をよくしたもの。ゴウゾウではゴウゾウカマスといわれ、またミツマタなどもつくったようです。

茂倉では、おじいさん、おばあさんがとまりがけで中野森やゴウゾウにズミヤキにきては山をよくしたもの。ゴウゾウではゴウゾウカマスといわれ、またミツマタなどもつくったようです。

たわれていました。

「ヨメにいくなら茂倉はおよし、茂倉向こう坂苦でござる」茂倉側のひや水の下あたりにむこう坂というところがあつて、そこが大変だったといふことでしょう。西之店で一杯焼酎をひっかけて元気をつけていきたくもないことでした。

そういうえば、こんなエビソードもあります。茂倉の金五郎さんとい人が西之店で酒を飲んでいるうちに荷をつけた馬のほうは家に帰つてしまつた。

いたそうです。
もう十何年もたたますか、友達三人でワラビ取りに峠まで登りました。ワラビのほうはサッパリだめでしたが、そこで飲んだり食つたりしてたいへん楽しかった。ああいうことはもう出来ませんね。もう歩けませんからね。

十谷と茂倉がこんな機会にまた近くなるように氣をつけて越して来て下さい。おまちしています。
(十谷・エビス屋)

昔の十谷峠

十谷 横口ヨシ子（70才）

終戦となつて何もない時、こまつてシズ子さんと交換してもらうため（昔、十七、八才のころ私のおじが山をしていて大原野ヘトチ板をしょいにいったことがあるので）その道のおぼえが清一さんやスギさんを知っていたから、そこへお父さんの古着なんか持つて交換にいった時のことです。

オオゾウリの上にタクエという所があつて、そこで四、五人の親類の者が、何かたくさんしょいこんで、またウサギもつちしてそれちがつたら、食料もないところだから「シズ子いいなー、ほれじやーおらんとうもむこうにいつたらウサギでももらつてくるか。」なんていいながら、によこ歩いて峠をすぎて、私が先になつて桜のオネと水のオネの間を歩いている「いたぞ、いたぞ！」「何が？」「あそこに横たんばになつて」最初は大かなんかだと思つたけれど、そこに寝ているからそばにいつてシズ子に足をもたせ、私が頭をもつてヨイコラショットと石の上のせて、よくみると横腹をくわれて、まだ生きているけれど、口がとがつていて、シップボが太いから「キツネ、キツネ、犬にでもおわれてここに来たずら」いざれにしても帰りがけに持つて帰ろうというわけで、その上に草をかけて、「キツネのえりまきはいいちゅうぞなー」というような話しせ

ながらいくと、さあえらい谷にはいつてしまつて、大原野の南沢、御殿山のほうにはいつてしまつて、着ているものがびんびろんになるくらいそこいらをつれまわされました。キツネにバカされた時は川の流れをみればよいというけれど、もうシズ子は「ナムミヨーホーレンゲキョウ、なにとど道を教えて下さい。」なんて泣くようにして拝みだしている。そ

こに大きなトチの木があり、その下を川が流れているから、とりあえずその根もとにすわつて考えてみようとしばらくすわつていると、そばで茂倉のおばあさんが草をかつていてはなでました。そこで「おーい、おーい、おばあさん、こまるよう！」「道に迷つちゃつて、大原野へ行くにはどうしたらいいづら」と聞いたら「しかたがないから、もう少し上に登れば茂倉にいく道があるからそこにいつたんでて、そこから大原野へ行けばよい」というから、やつとのことで大原野につき、清一さんの家にたどりつきました。

帰りには今度は迷わないようになると、スミあんねえに途中までおくつてもう真暗で、オオゾウリには夜の九時になつてしまつました。

おとうさんが生れたばかりの赤ん坊をおいていたから心配して峠までむかえに来たけれど、まだこないから今夜はオオゾウリにとめてやつてくれりょーと言つて帰つたと伝えられたけれど「いや、それはいつちやーいらのう、帰るかち」といつて今晚ちやうちんをかりて、頭の手ぬぐいでちやんねー」といつたら「ヨシヨねえさん、学校の生徒が騒ぐわけねえじゃん、ここは丸山じゃんけ」といわれて気がついた。

そのうちに「おーい」「おーい」とよぶ声が聞こえました。それでよくみると足もとを小さいものがついてくるから、あまたあいつだなと思つて、村にはいると今晚ちやうちんをかついでとまぐちをまたぐと一拍子、

戸を閉めました。

後で、にん棒を持っていたんだから一つにぶんなくってやればよかつたろうにと言われましたが、帰りにも迷つたら、もう怖くて怖くてそれどころではありませんでした。ほんとうに怖い思い出です。

"みみ"について

古くから、十谷に伝わる「みみ」は汁物の一種で人寄せの時に作られる祝い料理です。

いつごろからこの「みみ」を作るようになったのか、どんな字を書くのか、そのへんのことはよくわかりませんが、ただ慣習として、母親から娘、息子、姑から嫁にと受け継がれ伝わってきた十谷独特の料理です。

由来

一説 昔、隣村との間に争いがおこり、今日その決着がつくという朝、十谷の村では筍（穀物をふるつて、くずやからを分ける農具）に野菜をのせて神様に捧げたところ、この争いに勝つことができた。それ以後、この土地でとれた小麦粉をねつてのし、筍の形に作り、自分達が丹精して作った野菜と一緒に煮込むようになりました。

二説 土地がら、十谷は昔から農業が主で、野菜もいろいろとれました。自給自足の生活の中で、この野菜は貴重なものなので、筍にたくさん入れて奉納し、収穫を祈ったのが、いつからか小麦粉をねつてのし、筍の形を作り、野菜をいっぱい入れ、味噌で煮込むようになりました。

「みみ」を作る機会

結婚式、正月（三が日は雑煮をしないで「みみ」を作る）、選挙の当選祝、お祭、新築祝、供養……など、お祝いごとか、人よりの時に作る。



第二部 十 谷 越 道 中（感想文）

十 谷 峠 越え 中 学 校 説 文

ふるさと運動

—十谷峠越えに参加して—

早川北中学校長 市川 泰

私は、この四月國らずも早川北中へ新任校長として赴任した。辞令を受けた時、一校の責任者として学校経営に対する幾つかの方針を考えたが、その中の一つに「地域に定着した学校教育、地域を愛し育てる人間を育成する学校教育」を主要目標として、全職員と協議し、折にふれ生徒指導に当ると同時に、自分達も積極的に地域にとびこんできたつもりである。春の山菜祭りへの参加と子どもたちへの遊びかけ、YBS教室の「早川町の史蹟探訪」への参加、また社会体育への学校施設の開放や、地域諸活動への職員生徒の積極的参加等々は、さきの目標達成の具体的なあらわれであり、少しでもこの町を理解し、もり上げたいという私達の願いをこめたものであった。

一方、高度に文明化した社会に生きていく生徒には、高い学力と強靭な体力、そしてそれを支配する確固たる精神力をつけてやることはまた極めて大切なことは論をまたない。私はつねづね職員と話し合い、ともすれば安逸に流れ、苦難にあえればすぐへこたれがちな風潮の現代っ兒を、強い子に育てる教育を学業体育の両面にわたって強調してきた。

この時に、町教委主催の「先人のわらじの跡を探ねての十谷峠越え」の呼びかけがあつたわけである。私達はただ単なる懷古趣味や体力づくりだけではなく、以上述べたような見地に立って強力に生徒によびかけを行つた。その結果、生徒二十六名・戦員二名の参加予定者が生れたが、当初予定した日が雨のため一日延期になつたので、実際参加したのは生徒十九名、職員二名であったが（北中全体の約三分の一）参加してみて、私にとつても、生徒にとつても大変意義深いものがあった。以下特に私が強く感じたことを例記することにする。

〔昔、峠越えをした老人から生々しい体験話をじっくりと聞けた〕

私は、生徒の監督を中心としたのみ、できるだけ老人と一緒に歩き、その話を聞くように努めた。老人は昔歩いた道をなつかしみ、この企に参加した人ばかりだったことと、私達が同じ苦労の道を一緒に歩いてくれるという共感を持てくれたことからか、おじいさんも、おばあさんも、話しかければそれこそ管がはせた時の水道の水のような勢いで、眼を輝かせて思い出を語ってくれた。炭焼きのこと、炭を背負つての峠越え、お子守、牛追い、やぶやき、お祭に仕度等々、峠越えにまつわる思い出話は、出かけるから十谷へ着くまで尽きたことがなかつた。自分もその道を踏みしめているという実感が、きく私をそさせたのかも知らないが、私は近頃にならない感動を受けながらこの話をきいた。特に茂倉に生れ、大原へ嫁いでいたというおばあさんの話には、想像を絶する先人の労苦と努力がにじみ出でていた。そして、ふと熊本県の五木の里が浮かんできた。そしてこの先人の努力を考えれば、今の早川町だって、必ず発展し生きる途が開けてくるはずだと考えざるを得なかつた。私はこの時の話を翌朝の全校朝会で話をした。

〔この行事は、ただ単に早川町側からの一方通行だけでなく、十谷側の迎える態勢があつたことにより、大成功を納めた。〕

早川町側から一方通行であつても、それなりに大きな意義があつたと思うが、峠までの五開中生の出迎え、十谷地域の人々の熱烈な歓迎、十谷分校々庭での両地区民の交流、そして、婦人会の郷土料理「ミミ」のもてなし、どれもこれも印象的なことばかりで、私達大人は勿論、参加した生徒にとって、生涯残る思い出になるに違ひない。特に印象的だったことは、迎えてくれた十谷の人達全部の目が、深い親愛の情に溢れていたことだ。もし、私達がバスに乗つて十谷を訪れたのでは、とてもあの目の色は出なかつたにちがいない。恐らく、十谷の老人たちは、早川と十谷との昔の交流を知らない若者に、子どもたちに「きょうあの峠をこえて早川の古い友達がくる。昔の早川と十谷との交流はこんなだった」と、ことこまかに話してあつたに違ひない。私達の到着が予定よりおくれたこともあつたろう

が、どの人の目も、古きよき友、なつかしい親戚、苦楽を共にした戦友をでも迎えるような、待ちこがれた色が、そして到着を喜ぶ色で一杯だった。私は峠を越す時の苦しさが一度に消し飛んでしまう思いだつた。

「沿道の茂倉部落の人達に感謝を、企画のすばらしさに敬意を」

十谷越えに一番関係の深かったのは茂倉部落だから、茂倉がこの行事に協力するのは当然だと言えばそれまでだが、茂倉公民館での湯茶の接待は免も角として、十谷峠の頂上まで材料を背負い上げ、現地で味噌汁を煮て、幾杯でもおかわりしてくれるなどということは、通りいっぺんの協力の気持で出来ることではない。あまりおいしかったので、体育祭の時に郷榮会の会長さんに聞いた鳥のガラのステープまで

背負い上げたとか、全くその気持には感謝の外はない。

天候に禍されたことを除けば、すばらしい成功を納めた行事はそのもとを考えれば、何と言つても企画のすばらしさをたたえたい。平坦な道の準備と違つて、事前調査にしても、道路整備にしても非常なご苦労があつたことと思われるし、また十谷への呼びかけも、他町村のことであるから、多分に気をつかう面があつたことと思われるが、それもこれも克服して見事に実をいらしてくれた町教委の企画に深く敬意と、大きな拍手を送りた

い。

「おわりに」

人間の老化は足から始まると云われるが、私もその例にもれず、足に自信のなくなってきた昨今であったが、思いきつてこの行事に参加して本当によかつたと思う。それにしても、夏のスクスクスクールと云い、工場誘致条例と云い、また特別奨学金条例と云い、町当局は必死になつてこの美しい町早川町を過疎から守ろうとしている。この行事もその一つのあらわれで、この行事に参加した若者の心に、先人の足あとを偲び、その生きざまの導きから我が町、我が故郷を愛し育てる心が芽ばえ育つてくれる事を切に祈念しながら結びとしたい。

大草里には二軒の家があつたそうです。なるほどきれいに積んだ石垣がそれを物語つていて。大きな釜もあつた。風呂釜ではないかと思う。もう一軒の方には、かまどの跡が残っていた。

昔、ここから二人の子どもが柳川の学校に通つていたと会長さんが教えてくれた。信じられない事だ。雨の日、雪の日を思うと、その子どもたちの苦労はどんなだつたろう。その苦労話や、その苦しみに耐えぬいたことが、その後の人生にどのようにプラスになつたかを聞いてみたい気持にかかる。

帰る道々、早川町の人たちもここに住んでいた人達の話を聞くことができた。ここは峠越えの休憩地で、ここ二軒の人達はとても親切にしてくれたそうです。熱いお茶にお菓子、つけ物をたくさん出してくれたこと、あいにくお菓子のないときには味噌を手のひらにとつて接待してくれたとの事です。あるだけのものは何でも出してなそととする心には、じんとくるものを感じました。人恋しさもあつたでしょうが、苦しみがわかるものだけにできるいたわりの心と思うべきでしよう。現代人がどこかに忘れ去つたもの、とりもどしたいもののひとつではないでしょうか。

九十九折の坂道はけわしく、どこまでも続く……古屋先生の顔色がすぐれない。「昨夜おそくまで来客と話しこんで寝不足で……」という。子ども安全確保のために無理に頼んだのだが、気の毒なことをしてしまつたと後悔に似た気分になる。私も相當に疲れていたので、「休み休み登りましょ」と歩調を合わせる。しばらくすると思い出したように「ソ連軍の侵入で興安嶺を越えて逃げたときのことを思うと何でもありませんよ」と自分にいいきかせながら話しかける。「でも、あの時は若かつたからね……」

ふるさと運動

「十谷峠道中」に参加して

五開中学校校長 竹 中 正 裕

九月二十四日（日）朝六時十五分の天気予報を見終わつたところへ、早川町教委の望月先生から電話が入つた。「こちらはいま小雨が降つていますが、見通しが明るいので集合をかけていますので、よろしくお願ひします」「決行ですね」「そうです」「わかりました」早速教頭先生のお宅に電話をして手配をお願いする。七時、古屋先生から「都合をつけて参加します。七時三十分頃伺います」と電話がある。急いで支度にとりかかる。

あまり反応はない。

八時三十分ぎりぎりに十谷分校に着く。教頭先生は既に到着していてP.T.A.会長さんと共に区長さん、婦人会支部長さん宅あたりへ顔を出してく。なんだから前途四千五百米が相当きついものに思え、一抹の不安がただよう。二年の修二君が先頭をきつて身軽るにさっさと登つていく。ハイキングコースとの分れ道のところにちよつとした展望台がある。ここで一息入れることにする。智恵美さんがあめを配つてくれる。展望台に立つと大柳川へ流れ込む支流の谷が美しく見える。天気の回復のきざしがみえはじめてきた。

九時分校を出発する。民宿のお客さんが不思議そうな顔で見る。源氏庄の上のつり橋を渡り、いよいよ峠にかかる。はじめから相当急なのぼり坂だ。まだ千米もあるのかと力のぬける思いがした。そのあと千米の長いこと……なんにしても平原所が全くない、登りづめの道で相当に長い所もあり、時々危険を感じる場所さえある。もう三時間近くになる。

昔の人たちが「なあ苦しいだろう、しかも足を三俵背負つてここを下り、米や塩や酒をかついでここを登る苦しみがわかつたかね」と笑つて話しかけてくる。たくましさをなくしてしまつた現代人をあざ笑うように。

木の根に足をかけ、岩を踏みしめて登る足に昔の人の足が重なつてみえる。よろめく足は自分の靴をはいた足、しっかりした足どりはわらじばきの昔の人の足、そのわらじばきの足の方がさつさと先に行つてしまふ。

峠の上からマイクで呼びかけられた。「五開中の皆さん、早川町の人たちが峠の上であつて味噌汁を作つて待つています。もうすぐです。元気を出してください」と——これはまずいことになつた。立場が逆になつてしまつた。教頭さんが心配して引きかえしてきて「大丈夫ですか」と心配顔にたずねる。会長さんも待つていて「もうすこしだから、そろつて行きましょう」と元気づけてくれた。

やつとのことで頂上に着いた。あまり広くもない峠の上の広場に早川町の人たちが、たむろしてガヤガヤしていたが、一齊にこちらを向いて拍手で迎えてくれた。小さい子ども、小・中学生、若い人、女人、老人といりまじり、ふるさと運動にびつたりの集団だつた。この催しが如何に早川町の人々の関心の的であつたかが伺えた。枝をやわらかい土につきたて、帽子や手拭いを掛け、リュックをおろすのを待つていたかのように両校の校長のあいさつである。

「歩いてみて、はじめて昔の人々の苦労がわかりました。昔の話がきっと素直に理解できると思います。また、昔の人の生きる力というものがわ

かりました。」と手みじかに実感を申しあげてあいさつにかえた。まだ息がれがなおっていない。

あいさつが終わると、写真をとるからそこへならべといわれる。峠の頂上を示す大きな標識の前にならんで腰をかがめてレンズを見る。すると左の方から味噌汁を盛ったコップをさし出して飲めとすすめる人がいる。すこしでもはやくあつい味噌汁をのませたくてたまらない、その気持がとてもうれしかった。

峠の下から水やバケツや四角い缶をかつぎあげて、味噌汁を用意しくされた茂倉のたちの気持は、さっきの大草里の住人たちが峠ごえの人々に示したものでなしと一脈通するものがあると、しみじみ感じながら、温かい心も一緒に味噌汁とともにすりこんだ。

にぎやかなやりとりがあちこちに起り、交歓はいよいよ盛りあがりをみせってきた。味噌汁は一杯目をおねがいした。PTAの会長さんが細い竹で箸を作ってくれた。箸という字に竹冠がつくのもここらに起因しているのかなと思いながら汁の中の麩をつまみあげる。教頭さんは四杯目をおかわりしたようだ。

午後一時三十分いよいよ峠を下ることになる。二、三人前を行くおばあちゃんは七十六才とかで、昔、この道を通って仕事をした経験者であるときく。その足どりのたしかなこと、歩く姿に貴重というか風格というか、そんなものが感じられる。

後に続く茂倉の若い主婦は教頭さんの三里中学校での教え子というので気軽に話もはずむ。実によく昔の話をはなしてくれる。さきに書いた大草里の住人はなしも道々この人たちに聞いたものだった。

再び大草里をすぎた。ほつほつ十谷の部落の見える所まできた。一息入れた。下りも結構きつい。膝ががくがくしてきた。前を行く早川北中の市川校長が茂倉の人から聞いた話をぽつりぽつり足のはこびに合わせて話してくれた。

「茂倉の人たちは炭焼きを主な生業としていた。この仕事は男の仕事で

先人の足跡を訪ねて

早川北中学校

早川智也

十谷峠を越えて

早川北中学校

早川英彦

町のふるさと運動の一環としての十谷峠越が九月の二十四日、朝霧の立ちこめる中で行なわれた。

七十五名の参加者のうちに北中生徒十九名の姿がみえた。この七十五名の人々、八才から八十二才の老人までという広年令にわたるものである。

茂倉より一度、谷川へと下り木々のかぶさる道にふみこみ十谷の峠へと向った。

歩きながら僕は思った。僕達の祖先はこの道を重い荷を背負い何を考えながら行き来したのだろうか。見えはしない落葉にうもれたその下には、祖先の生活の一つ一つが汗や涙や血となってふみしめられている。

寒さに耐え、夏の暑さに打ち勝つてこの峠を越して行つた人間のドラマがあるのだ。

峠でつくってくれた味噌汁のあたたかさは心にしみるものだった。

峠には神をまつった社が一つ、木の根もとにひつそりとあった。そこにも祖先の手を合わせて座る姿があった。五開中の出迎えをうけて十谷へ下つた。長い間歩いてやつと下に小さな集落がみえた。ここまで正味五時間以上は歩き通しだった。

十谷へついた。ついに全員が歩きぬいたのだ。十谷の人々の盛大な歓迎をうけた。ここまで道のりを考え歩きぬいたことに満足感をおぼえた。そこで昔の人々の様子を聞く機会を得た。昔の人のうちの一人は僕たちが五時間かかった道を一時間足らずで行つたことがあるという。母が炭を背負つてこの峠を越して來たということだ。

そこで僕たちは十谷の郷土料理「みみ」をごちそうになつた。味はほうとうとあまり変わらないが、あのあたたかさはよい思い出となつた。

とにかく「先人の未来をたくし足跡をたずね、先人をすこしでも知れた事」は意味深い。



十谷の部落がいよいよ近づいてきた。大柳川の川音が聞こえる所まできた。やつと、ほんとうにやつとのことで峠までいってきた。

上り三時間三十分、下り一時間強の苦行の間に長い時間の距りを越えて昔の人との対話ができたような気がして心は充分に満たされていたのです」と……。

ひとと並やくと女がそれを背負つて、峠を越すことになるのだ……。男は次の釜の仕込みにとりかかる。乳のみ児をもつ主婦がいちばんつらい思いをして一緒につれてくる。子どものない家では、おばあちゃんがこの代りをとめる。峠を越して大草里までくると乳のみ児はこの家にあずけて独りで十谷まで降りて行く。仕事をすませて昼近くなるともどり、乳をやり昼めしをさせて峠を越える。帰りの荷物の軽いときはモヤを作つて持ち帰る仕事も加わるという。一家の総力をあげて生きるために働くといつた姿ですよ。年よりのない家の子は、ほとんど学校へ行つた記憶がないとの事です」と……。

ひと並やくと女がそれを背負つて、峠を越すことになるのだ……。男は次の釜の仕込みにとりかかる。乳のみ児をもつ主婦がいちばんつらい思いをして一緒につれてくる。子どものない家では、おばあちゃんがこの代りをとめる。峠を越して大草里までくると乳のみ児はこの家にあずけて独りで十谷まで降りて行く。仕事をすませて昼近くなるともどり、乳をやり昼めしをさせて峠を越える。帰りの荷物の軽いときはモヤを作つて持ち帰る仕事も加わるという。一家の総力をあげて生きるために働くといつた姿ですよ。年よりのない家の子は、ほとんど学校へ行つた記憶がないとの事です」と……。

九月二十四日、早川町で行なつた故郷運動の一つ、先人の足跡をさぐるということで、十谷峠を越えて十谷へぬけるということで参加しました。歩いてみる前は、そんなに苦しくないだろうと思っていましたが、いざ歩きはじめると、茂倉へ登るまで、もうくたびれてしまい、これは思つたより大変だと思いましたが、昔の人々のことを考えると、このくらいのことと思つてがんばりました。

茂倉で休み、熱いお茶をいただき元気を出して登りました。登る人の中には、八才の子供から八十才以上の老人の姿も見えました。

登つていて途中は、ゆっくり話しをしながら登つて行きましたが、さすがに頂上近くまで登るとくたびたで、早く頂上に着かないかなどと考えました。

頂上に着くと、茂倉の人たちが、わざわざ水をしょい上げ、温かいみそ汁をつくってくれました。あそこでつくつてくれたみそ汁の味は一生忘れることはないでしょう。それから少しすると、わざわざ私達のために、五開中学校の人達と先生など数人が迎えに登つてくれました。これには、とても驚き感謝しました。

下につくと、十谷の人達が、大せい出てきて私達をみんなで祝福してくれました。十谷名物の「みみ」というものをごちそうになり、昔の話しましてもらいました。十谷の人達のやさしさ、親切さを感じとてもうれしかつたです。

峠を越えてみて、昔の人達は、あの道を荷物を背負い、履物も今みたいな物でなく、わらぞうりをはいて登つた苦しさが、形は少し楽でしたが、しみじみと感じられました。一度つくつた友情は絶対にたえる事がないんだとはつきり思い知られました。

ふるさと運動に参加して

十谷峠を越えて

早川北中学校 竹内英雄

早川北中学校 中居守

僕は、学校であるさと運動に参加する人といわれて、友達に何んのこと尋ねた。すると、友達は「十谷峠を登って、十谷に出て帰ってくることだよ」と答えた。

十谷峠と聞いた時僕は、小学校五年の時に登った時のあの富士山の美しかったことが想い浮かんだ。と、同時に友達が行こう、一緒に登ろうといったので、登ることにした。

登つて行くと僕は感じた。ぜんぜん、十谷峠入口の所からあんまり進んでいかなかったような気がした。そして、二時間半くらい登つてついに峠についた。

そこで、飲んだみそ汁の味は何んともいえなかつた。ついおかれりをしてたくなるような味だつた。

そして屋食を済まし、峠を後にした。そして、十谷についた。さすがに、足ががくがくだった。そこで昔の人は、重い荷物を背負つて、峠を越えた時の力強さのようなものを感じた。そして、十谷の婦人会の人達においしい「みみ」までごちそうしていたとき、感謝の気持で一杯でした。

ほんとうに、こういった運動は、昔の人の苦労も知ることができ、とても楽しく勉強ができた。これからも、こういった運動をしてもらいたい。



早川北中学校 深沢治人

九月二十四日、僕達は、十谷峠をこしました。

予定でいくと二十三日でしたが、雨が降つたので二十四日でした。二十四日の日も朝のうちは雨が降つていたので、いけるかなという感じでした。

登るという連絡があつたので、東電の広場に行きました。

まず、茂倉まで歩いて行き、茂倉の人達にぶどう茶などももらいました。

僕は、九月二十四日、早川町教育委員会主催「先人のわらじの跡をたずねて」というテーマの行事に参加しました。ふだん、あまり歩いていない僕にとっては、新倉から十谷への道のりはきつく、苦しいものでした。母から聞いたことがあります。そのときは、なんとも思わなかつたが、十谷まで歩いてみて、その苦労が身にしみてよくわかつた。昔、人々は、この十谷への道のりを荷をしょつて歩いたという話を僕はおそろしいものだと思いました。僕は、この新倉から十谷までの歩け歩けもせず、バスの座席にこしかけて、歩けば、一時間半ぐらいするところをバスで十五分ぐらいで通っています。ほんとうに科学の発達というものは、大会に参加して、いろいろなことを学びました。

今、僕は、西山から三里までの学校通学を、スクールバスでえらい思いもせず、バスの座席にこしかけて、歩けば、一時間半ぐらいするところをバスで十五分ぐらいで通つています。ほんとうに科学の発達といふものにはおどろく感じました。

十谷峠をこして

た。しばらくして山道に入りました。まず、英男君と地図を開いて、峠の頂上までどの位あるか見ました。頂上に行くには、かなり時間がかかり、役場の人たちに

「まだ着きませんか」

と聞きましたが、

「まだ、まだ」

と言いました。

もう二時間くらい歩いているのに、まだかなあと思いました。途中、なめこがあつたので少し取りましたが、英彦君にやりました。やつとの思いで頂上に着きました。

もうそこには茂倉の人たちが来ていて、みそ汁をわかしていました。そのみそ汁はとてもおいしかつたです。

昼食を食べ、十谷の方へ下りました。十谷で「みみ」という料理を食べ、家に帰りました。帰つて来た日はつかれていたけど、次の日はなんともありませんでした。

もし、来年もするんだたらまた行きたいと思います。

十谷峠をこえて

早川北中学校 加藤孝之

早川北中学校 早川英男

九月二十四日に、ふるさと運動がありました。それは、茂倉を経て十谷峠を越え十谷へぬけるというものです。この催しは、先人の足跡をたどるということで行われました。総勢七十五名が参加して、その中の最高年令者は八十二才のお年寄りから、八才の子供までいました。

最初に、茂倉の公民館でお茶や果物をごちそうになつてから出発しました。少し歩いては休み、少し歩いては休みして峠の頂上に向かいました。途中、水の尾根で水をくみました。冷たくて、とてもおいしい水でした。しかし、登つていくうちにだんだんつかれていきました。僕は、昔の人は、

ここを炭やマキなどをたくさん背負つて登つたのかと思うと、つくづく感心してしまいました。そして、サクラの尾根をこえて、セキトウの尾根をこえて頂上へ着きました。すると、茂倉の大人の人達が先に一升瓶などに水をくんでもつていてみそ汁を作つてくれました。それは、空腹ということも手伝つてとてもおいしかつたです。そして、頂上で十谷の五開中学という学校の人がくるのを待つていました。しばらくするときので、そこで屋食にしました。屋食を食べてから、少しして、十谷においていくことになりました。初めは、下りの方が楽だと思っていましたが、足がすくんでしまい、とても大変でした。天気が良ければ、下りながら富士山も見えたのだろうけど、その日はあいにく見えませんでした。そしてやつと十谷に着き、十谷の郷土料理の「ミミ」というものをごちそうになりました。僕は、うどんのようものが好きだったので、とてもおいしく思いました。

それから、バスにのつて新倉まで帰つてきました。またいつか、こういふ催しがあつたら、参加したいと思います。

十谷峠をこして

早川北中学校 加藤孝之

早川北中学校 早川英男

僕は、町の行事のふるさと運動に参加したのは、町の広告を見て友達と相談して参加することにしました。学校でも参加するようにといわれ、進んで参加しました。

当日は雨が降つていたので中止になりましたが、次の日は小雨でしたが決行しました。集合場所に集まり出発しました。少し霧が出ていたけど、初めて通る道だけあって、不安の所もありました。途中、つゆでぬれる所や道が細い所もあって、ようやく十谷峠の頂上に着きました。茂倉部落の人達がみそ汁を作つてくれて、とてもおいしかつたです。

五開中学校の生徒たちが迎えにきました。

十谷において、十谷の分校で「みみ」という、すいとんに似た料理を出してもらいました。

十 谷 峰

早川北中学校 深沢清彦

先人の足跡をたずねて

早川北中学校

深沢泰司

僕たちは、先日、早川町教育委員会主催のふるさと運動に参加しました。これは、「先人の足跡をたずねて」というテーマで一種の歩け歩け運動のようなものだと思います。

コースは、早川町新倉から茂倉→十谷峠→十谷と先人の生活の足でもあつた道を行くわけです。

九月二十四日、朝、新倉東電広場を出発しました。空は、あいにく雲つてましたが、みんなやる気充分です。人数はおよそ七十五人で茂倉までは全員走り切りました。茂倉で教育長などの話を聞き、三十分程して今度は十谷峠めざして行きます。初めはそれほどえらくなかったが、半分ごろになって、だんだんえらくなり、早く着かないかなあと思ってばかりいました。やっと峠に着き、茂倉の人達が苦労して運んできて心をこめて作ってくれたみそ汁を飲みました。あまりのおいしさにおかわりをしました。

それから、五開中の生徒も十谷の方から撤つて来ました。それから、五開中の生徒と僕たちとで十谷をめざして下りました。十谷までは僕たちが撤つてきた道ぐらい長く、足に豆が出る人や、靴ずれをする人などいました。僕も靴ずれができました。

やつと十谷分校に着き、十谷の郷土料理の「みみ」という料理を食べました。味は、ほうとうと変りませんが、とてもおいしかった。それから家へバスで帰りました。

僕は、これからもこのような事をやっていけばいいと思います。又、これからも五開中の人たちとも、きっと交流を深めたいと思います。

五開中学校生徒の感想

(要点のみ)

私は、昔の人が体験したこと自分も体験してみようと思い参加しました。十谷の林道の方は何度も行ったことがあるけれど、峠は始めてとあって、不安と期待が入り混つた気持で峠へ望みました。

回りくねったところ、すごく急坂の所、石がでこぼこした所と、一つもよい所のない道を、昔の人は毎日のように歩いたり、馬をひかせたりして、苦労した後がまだまだと感じさせられた。

笠井鈴美

八時三十分、十谷分校の校庭に集合した。そのときはまだ霧が出ていて行くのかどうかな、と思った。教頭先生がマイクで九時に集合するようにいった。

「これは行くのかな、いやだな」と僕は思った。
僕はこの十谷峠登山をして良かった。あの苦しい道を毎日荷物を持って通つたと思ったら、この登山は楽なものだ。ほんとうに行事をして昔のことがわかつてよかったです。

望月節夫

この十谷峠道中に参加して、私はとても良かったと思いました。私たち先人が、どんな風に茂倉→新倉との間で物資、その他の交流が行なわれたのか、とてもよくわかりました。

深沢美富士

十谷峠に早川町の人たちを迎えて行くと聞いたとき、あんな遠いところまで行くのはいやだと思いました。しかし、ただ行くだけでなく祖先の歩いた道を行くので一度歩いてみたいと思った。

僕がこの峠を越す気になったのは、僕の母がまだ幼い時、この峠を越して、なつかしく思い、僕に「昔の人の苦労を知つて來い」といったからである。

九月二十四日雲、僕たちは新倉の遊園地に集まり、校長先生の話を聞いた。それから、少しの時が過ぎ、茂倉までいすいすい登りました。そこまで登るのは、えらくなく、これからもこの調子だといいんだがなあと思つた。茂倉では、その部落の人たちが、お茶などを出してくれてよかったです。僕も他の友もそう言つていました。

さて、これからが十谷峠だと思うと、胸がわくわくしてきました。茂倉を出て十五分後に、空がだんだんと晴れてくれました。僕は空を見て、このぶんだと暑くなると思いました。だけど、この時思いました。今、歩いている道は、僕の母が幼い頃歩いたとは……。

また、かなり登った所に水がありました。やつといちばん上まできました。僕はとてもうれしかった。頂上には、茂倉の人たちがみそ汁を作つて的人たちがきて、こちらから西山の手拭をプレゼントしました。今度は下りて五開中の方に降りて行きました。途中で、友だちがはちにされ、おばけの顔のようになりました。とっても氣の毒のようにも思いました。五開中に着くと、そこの料理「みみ」という物を食べました。

その後、僕が小学校の時の校長先生にあえて、とてもよかったです。

この日は、中学二年の思い出の一ページになりました。



望月正

僕たちは、ただ歩いただけでえらかっただけれど、祖先たちは荷物を背負つて毎日行つたそうだ。僕は実際に歩いてみて、祖先の苦しみがある程度わかつた。

望月辰雄

僕たちは、昔この道を毎日のように、荷物を背負い登つたりしたのだから、頂上まで楽に登れるだろうと思っていたが、頂上まで行くともう歩けないくらいでした。頂上に着くと早川町の人たちはもうきていて、迎えに行つたのに、逆に迎えられたようでした。早川町からは、早川北中の生徒二十名と先生や父兄の人たち五十人くらい来ていた。この中には八十才を越したおじいさんや、まだ八才の女の子がいました。

望月辰雄

僕たち五中の生徒は、雨が降つたあとなので参加したのは八名だけでした。早川の人たちは本当に来るのだろうかと少し心配でした。

十谷分校に帰つたら、もうすでにごちそうが用意してあった。そのごちそうを早川の人たちは、おいしそうに食べました。食べながら、おじいさんたちの昔話を聞いて、とても参考になりました。僕はもう一度早川の人たちと交流できたらいいな、と思いました。

久保修二

やつと三時間半かかって頂上に着いた。早川町の人たちとお弁当を食べた。みそ汁もいただきました。少し休んでから、またもと来た道をひきかえました。十谷分校で、早川の人たちとジュースを飲んだり、郷土料理「みみ」と一緒に食べたりしました。みんなよくがんばったと思う。

樋口弘樹

十谷峠へ初めて登つて一番強く感じたことは、昔の人は毎日重いものを背負つて通つたんだな、とってもえらかったんではないかと思いまし

た。でも、これをえらいからといってやめてしまうと、自分達の生活がなりたついかなくなる。そのため一生懸命ではなかつたかと思います。

私は、十谷峠へ登つてとてもよい思い出になりました。

川口智恵美

十谷峠道中に参加して

新倉望月重直



早川町教育委員会にて企画された「ふるさと運動」について、往昔、股引、脚絆、草鞋掛、草鞋を履いて登り下りをした十谷峠の想い出に、自分は高令の身柄で参加の各位にお世話を掛けることも考えられたが参加したい希望が盛り上がり、参加することに早川町教育委員会へ申し込みました。当日、昭和五十三年九月二十三日（土曜）秋分の日が雨で縦下げ、翌日二十四日（日曜）に午前四時起床、出発の準備を進めたが、前夜よりの細雨は続いている。新倉集合場に午前七時集合、同七時三十分前進、茂倉部落、午前八時登り、茂倉部落公会堂庭に入る。参加者が順次集まって賑わう。同公会堂庭にて参加者を四班に編成され、自分は第二班に決められた。

水地早川町教育委員会教育長殿より本日の行動について懇々と注意がなされて、お茶の接待があり、休憩する。雨もやみ、日射しがして來た。午前九時茂倉公会堂庭を発進、十谷峠を仰いで出る。茂倉川上流で茂倉部落に掛かる。同所に茂倉川第四堰堤工事が施行され、新鋭の建設機械が大音響、轟々と鳴っている。十谷峠も長い年月通行が途絶えたので荆棘繁茂した山道を道破するものと思っていたが、当局の配慮で通行に差支えぬよう刈り払つてあるとのことを聞き、この苦慮は消えた。

向坂の急坂を登るに、秋冷のため流汗の苦もなく喘ぎながら、午前十時三十分追分へ登る。此処は茂倉部落と新倉部落、大原野部落、十谷峠の三叉路で、先人も登り下りQ休憩場であった。この小平で参加一行休息、思いい思いの懇談に時を移し、午前十一時前進、水の沢へ登る。この沢は十谷峠の茂倉部落側只一ヶ所の山沢で、清水が滾々と湧いて流れ通行人の渴をいやした。

この水沢の尾根より峠道は緩傾斜となる。道を進んで十谷峠頂上へ正

十谷峠道中に参加して

茂倉阿部一三

此の峠は大正末期頂までは早川町北部地区住民の生活路として、雨の日も風の日も、日用品や物資を背負った人達が数十人は峠越したそうです。

文化の流れはどうする事も出来ません。早川沿には電力会社が工事用道路を開発しましたので、早川沿の部落の人達はその道路を利用するようになり、日用品や物資も皆トロッコを利用して運搬するようになり、日増しに入通りは減少して来ました。私も小さい頃母に連れられて峠を越えた頃は峠附近の道端には大きな原生林で、その合間より東には富士山、東北には甲府盆地を眺めながら歩いて越えたのです。今はこの辺一帯人工林、桧林と化して見違えるようになり、又、驚いた事に昔人家のあった場所にも家はなし、畑にも植林され、屋なお暗しとなっていた。唯、今歩いて来た道筋だけは昔も今も変わっていなかつた。私は昔便利であった地方程不便となつた気がする。これからは行政の谷間となつたこの一筋の道を早川北部地区の産業と観光のためにも陽の当たる行政を望みたいと思ひながら十谷部落まで下つて行きました。

秋の農繁期の真最中だったが、お姑さんの勧めで二年生（八才）の娘を連れて大勢の仲間に入れていただきました。

参加者の中では最年少の娘、小さい頃から身体が弱く、医者通いのたえない娘を連れての同行は一寸不安だったが、娘にも昔の人（祖父母）の生活道路を話だけでなく、実際に知らせたいという気持と、私自身が昔の人

先人のあとをたどつて

茂倉深沢礼子

今日の壮団について考えられることは、早期に十谷自動車道と茂倉自動

車道の未接続区域に接続工事を施行、新倉と甲府間が所要時間一時間で甲

府へ出る事に当局の御配慮を願いたい。来たる将来において三里地区の林

産物その他搬出等にてこの自動車道を完成することは必要迫られている。

現在、新倉と早川橋と甲府への交通所要時間二時間をするので、この十谷経由甲府行自動車道を開通することは早川町発展の一環であるから当局の御配慮を得て促進を待望念願致します。

午、参加各員登り着く。山の神社前に小平がある。一行休憩。焚火を焚き中食を摂ることにした。当局の配慮で大鍋で味噌汁を炊き、中味は椎茸、豆腐、切麸、葱を飲いて参加者に給与された。我が家で食う味噌汁とは異つた美味しさで中食をする。十谷峠の頂上で味噌汁を頂戴することは未曾有のことである。

本日、遺憾であることは紅葉の南アルプス連峰が雲に蔽われて眺望出来ざること、遠く聳ゆる靈峰富士が雲に被まれて展望がきかないこと、眼下に見る甲府盆地も雲に遮られ俯瞰の叶わぬことである。

峠の休憩場を十谷部落側に向けて午後一時三十分前進し、下る途中、大草里の二軒家へ掛らず下り、下肩に出て十谷川に着き、吊橋を渡ると「源氏荘」という温泉場を通り、鰐沢町十谷部落へ着き、鰐沢小学校十谷分校校庭に午後三時入場。参加一行が次々に入場。校庭に賀筵を敷いて酒宴を開き、十谷郷土料理「みみ」の接待を頂き、十谷婦人会各位より、「みみ」についての由来の説明を聞きながら頂戴、変った郷土料理に感服すると共に、御配慮賜わった十谷婦人会の皆様に深甚の感謝をする。

本日のふるさと運動について、十谷部落の各位よりの祝辞がなされ、水地早川町教育委員会教育長の挨拶があり、宴は盛り上りて民謡を歌い興じ、終りに万歳を三唱、宴場を閉じ、午後五時三十分山交貸切バスに参加一行便乗、十谷部落を後にし前進。後、五二の国道に出で南下、午後六時四十分早川橋を通り県道を遡り、車中、歌手の民謡放送を聞き、午後七時四十分新倉着。途中、無事故で帰宅出来たことは喜びである。

今日の壮団について考えられることは、早期に十谷自動車道と茂倉自動

車道の未接続区域に接続工事を施行、新倉と甲府間が所要時間一時間で甲

府へ出る事に当局の御配慮を願いたい。来たる将来において三里地区の林

産物その他搬出等にてこの自動車道を完成することは必要迫られている。

現在、新倉と早川橋と甲府への交通所要時間二時間をするので、この十谷経由甲府行自動車道を開通することは早川町発展の一環であるから当局の御配慮を得て促進を待望念願致します。

の御苦労を一步一歩かみしめてみたいと思つたからです。

昔の人は新倉・十谷間を生活道路として、どんな場合でも峠を越えて行つたんだと思うとなんとなく心強くなり、娘が歩けない場合は背中におぶつてでも頑張つてみようと思いました。

昔の人から苦労話を聞きながら、登る山道はくたびれを忘れさせてくれた。様子のわからない山道はとても長く感ぜられたが、昔の人はどんな気持ちで歩いたのだろうなど、いろいろ考えながら歩いていくと、十谷部落が見えてきた。その時の気持はなんとも言えない喜びを感じた。十谷部落でも人間関係は、昔の事をよく知らない私達でも、つい昨日までとなりあわせていましたように親しみをもって会話が出来嬉れしかったです。

郷土料理「みみ」をいただきながら、なごりはつきなかつた。

バスの中で、一日をふりかえり、参加者や十谷の人達のあたたかい心のふれあいを十分楽しめてくれた。お姑さんの好意に感謝し、又、ある面では昔の人はこんな苦労をしたんだよ、だから苦しい時は昔の人の事を思い出して頑張りなさいという強いお姑さんの愛を感じ、自分なりにプラスになつたと思っています。

ふるさと運動に参加して（十谷峠）

大原野 広沢 猛

九月二十三日、あいにくの雨でした。

夜の雨が気になつたのか眠れぬ夜が明け、二十四日の朝も小雨でした。私は、今日こそ雨で峠を越す事が出来なければ茂倉迄でも思い「コオモリ」をさして皆様より一足先に家を出、茂倉にて皆様を待ちました。公民館の庭にはお茶、果物、茂倉自慢の「サシミコンニャク」を頂き、全員揃つたところで教育長のあいさつ、又、係からの注意、ルールなどの説明

を聞き、自信なく七十四名「荒居」さんを先頭に霧の茂倉を出発しました。途中「キノコ」を見つけると疲れも忘れて、道より上に下にとかけ歩き、これはなんの神様で、この道は大原野からくる道とかの説明を聞きながら歩く事一時間十分、ここまで登ると天気も快復して陽の光も多少さし、高い山からの茂倉を見た時参加出来た事がよかつたと思いました。私達は二班でした。中には狩をすきな人、小鳥をすきな人、多種多様の話で疲れなど感じません。人が歩いた道かの様に「イノシン」の道もよくついて居り、昔はこんな所を「ローソク」の灯で鐵沢より食糧や衣類を「ショイコ」で運び、一人の時もあつたのでは、などと考えながら歩いていると「クマササ」の生いしげる頂上に着きました。この頂上にて又も茂倉の人達のもてなしの味噌汁です。水もない山頂での味噌汁のおいしい事、私達は「馬鹿の三杯」とかいわれておりますが、それ以上いただき、中には自分で「三杯」だと言って居りましたが、本当は「五杯」も食べた人もあります。

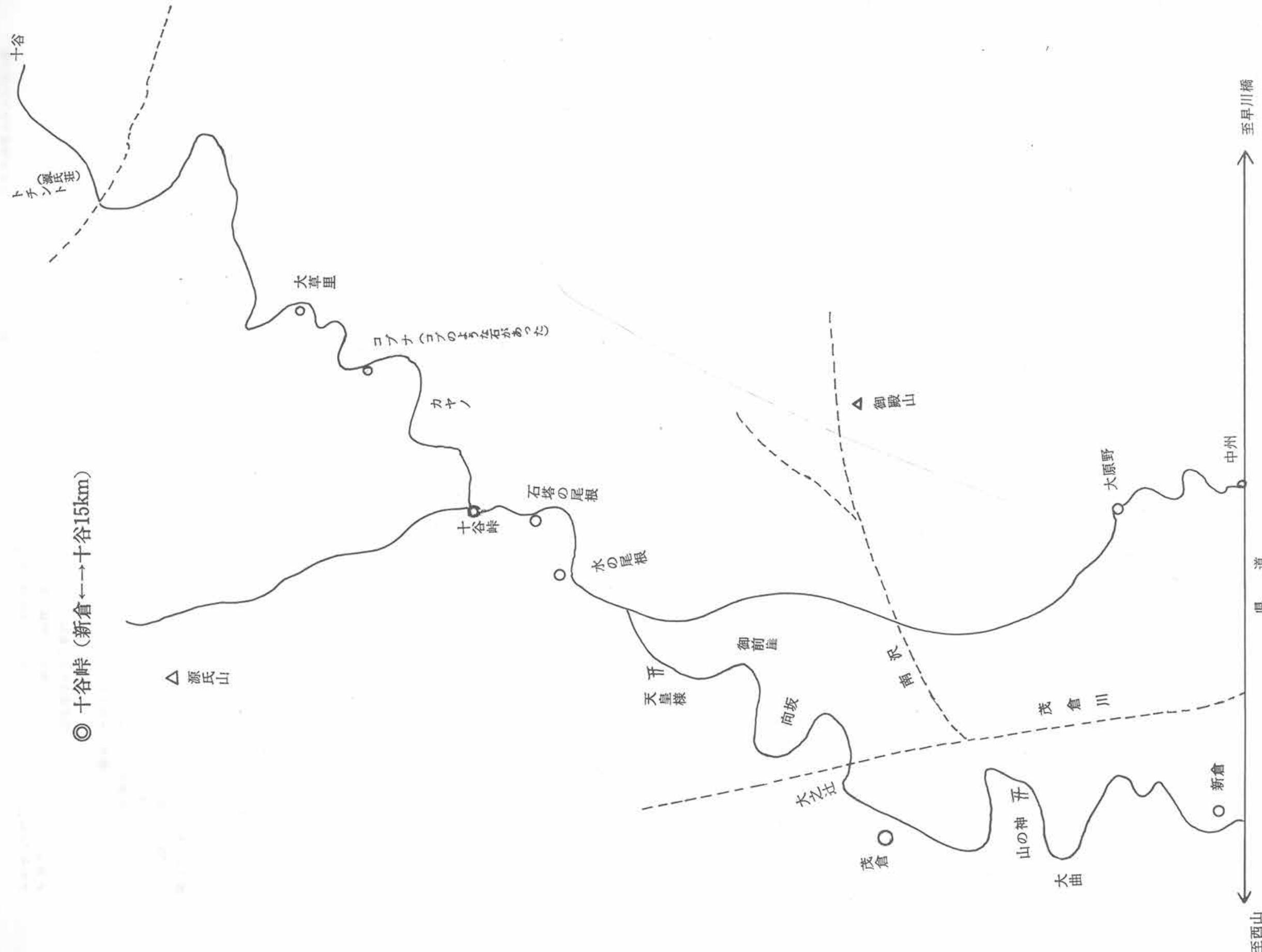
高い山での水のない山頂に、下から水又は色々の品物を背にて運び上げてのものでなし、昔から情は茂倉と言われた様、今のこの義理人情より自分が本位の世に茂倉の人達は今でも昔の人の教えを守り、子供達に教え伝えて居る事に感服致しました。

頂上にて待つ事一時間半、十谷の中学生の出迎えを受け、十谷へ向けて出発しました。展望台では霧で下の方も富士山も見る事が出来ません。登る時は足はあまり疲れなかつたが、下りになると爪先が痛みはじめ、ひざ頭もがくがくしはじめた頃は「大草里」の上あたりでした。昔の大草里は家があり、茂倉の人達の上り下りのお茶を呑む所だったそうです。今は家もなく、大きな「ホオ」の木と神様の「ホコラ」があり松の林になつていました。

一人の脱落者もなく、無事に十谷分校校庭に入り、十谷の人達の拍手での迎えを受け、大勢の歓迎のお言葉をいただき、十谷自慢の郷土料理の「みみ」を頂き、歌を歌い、時間も疲れも忘れてごちそうになり、十谷は今でも早川町の隣りなのだと改めて思いました。

編集後記

私は、この楽しかった一日、自分の体力に自信がつき、今後も町の催しがありましたら仲間に入れていただきたいと思います。



私達は、この樂しかった一日、自分の体力に自信がつき、今後も町の催しがありましたら仲間に入れていただきたいと思います。

編集後記

十谷峠道中（先人のわらじの後をたずねて）に思う

茂倉 望月一男

十谷道中は同じ茂倉に永住していながら、小学校四年の学童時代に一度甲府に行くとき父と歩いただけである。その時は小さい頃だったので何もわからず、夢中で歩くのが精いっぱいだった。今度越えて見てよくわかった。昔の人はよくこんな遠い山道を歩いたものだと思う。昔はこの道一本しかないため、新倉の人達も茂倉を通り、大原野の人達は上の大平で一緒になつて、毎日七、八十人の村人たちが行き来し、毎日の生活には何かを作つて峰を越していかないと金にならなかつたし、又、物々交換もできなかつた。また、茂倉の人達も炭を焼いたり、ミツマタを作つたりして、雨の日も雪の日も朝三時起きて登り、十谷で夜が明けたといふ。

ただ、話だけでは今の若い人達には想像もつかないような苦労をしてきただけに、代々受け継がれている祖先を敬う気持を常にもつてほしいと思います。

近年道路の整備、交通機関のめざましい発達により私達の生活は大変便利になっています。

この便利さにすっかりなれきつてゐる私達は、ともすればこのようない發展のために多くの先人が郷土の未来に夢をたくし、血と汗を流してきたことを忘れてはいるのではないでしょうか。峠道をきり開き、人の背で荷物を運び、トロッコ道を馬にむちうちら、ほこりだらけのデュボコ道を木炭自動車が走つた時代をぶりかえりながら、現代の私達の郷土をもう一度みつめてみるとことの大切さを理解していただきため、ふるさと運動のとりくみのなかで、いくつかある当時の生活道路のなかから十谷峠をえらび、参加を呼びかけましたところ、十谷の区長さん始め部落の方々、婦人会のみなさん方、又、茂倉郷榮会の方々、五間中学校、早川北中学校のご理解とご協力を得るなかで小学生から八十才のお年寄までと、はば広い多数の参加者のもとに十谷道中が有意義に無事実施できましたことを心からお礼申し上げます。

又、このたび折角のこの道中を記録に残こそらと企画いたしましたところ、多数の貴重なご意見、ご感想をおよせいただきました。

第一部は「昔の十谷峠越え」とし茂倉の穂子については郷榮会の方々に、又、十谷については五間中学生が部落のお年寄りに聞いたもの、本町教育委員会職員が取材したものをお載せてみました。

第二部では、道中に参加した方々の感想を載せて一冊にまとめてみました。

寄稿下さいました方々、又、ご協力下さいました各位に感謝を申し上げ汗をながし、元気に峠越えをした顔……。十谷分校でごちそうになつた「みみ」の大変おいしかつたことを思い出しながらお礼の言葉といたしました。

早川町教育委員会

社教主事 望月 賢明